

小谷村観光地域づくり審議会（第4回）

令和2年2月10日（月）

【村長（中村）】 皆様こんにちは。暖冬といわれる昨今ではありますが、ここまで雪が降らない年は過去にも経験がないと様々なところで言われております。村内スキー場においては全スキー場で滑走に問題はなく元気に営業はしているものの、全国的な雪不足から風評的にお客様の客足が遠のいている感は否めません。ここに来て、中国国内に端を発した新型コロナウイルスによる感染症の影響で、中国本土からの団体客が渡航禁止となってしまう、非常に深刻な状況が続いております。こんな時こそ知恵を絞って、無限の対策の中から活路を見出していけるようにしていかなければと思っています。

前回、私、出られなかったものですから、今日のことをすごく楽しみにしているんですけども、今日は地元委員の皆さん、5名の皆さんからお話を聞けるということでありますので、とても楽しみにしております。そんな中で、いろんな話をさせていただいて参考になることがあればと思いますし、この審議会の答申に向けてもいい話になるんじゃないかなと思っていますので、大変期待しているところでありますので、活発な意見交換をしていただければと思います。よろしくお願ひしたいと思います。

【観光振興課長（関）】 続いて、平尾委員長様からご挨拶をお願いいたします。

【平尾会長】 どうも、皆さん、こんにちは。

外部の委員さんの報告が一段落したところで、これで地元の委員さんからご意見をいただくということで、今日、いろいろ準備をさせていただいております。お一方、今日は10分ぐらい自由にお話しさせていただいて、あと10分は意見交換というようなことで、5名の方との意見交換という形で進めたいなと思っています。その後、前回、武者先生からご報告いただきましたので、そのまとめと意見交換ということ、それから、最後に総括と今後の予定というようなことで進めてまいりたいと思います。今日も4時までということですが、皆さんの活発な議論をぜひよろしくお願いいたします。

それでは、各地元の委員さんの報告をお願いしたいんですが、先ほど、レディーファーストでという、そういうことがありましたものですから、よろしくお願いいたします。

【藤原委員】 私は、伊折集落に住んでいる藤原真弓です。

この絵はゆきわり草の絵です。冬の絵で、今年、また雪がきのう、おとといとか降りま

したけど。今年のではないんですけども、その絵です。

私が小谷村に来て二十何年たちますけれども、ゆきわり草が2013年からオープンになりましたが、そこでのいろいろな活動とかについてお話しさせていただきます。

この左の上に見えているのがうちの旦那の父で信夫さんです。彼が2003年に伊折農業生産組合を立ち上げまして、2012年に亡くなってしまったんですけども、2013年にゆきわり草がオープンということで、それまでずっと集落のみんなを引っ張っていて、生産組合をやってくれたじいちゃんでした。とてもおもしろいじいちゃん、変わったことが好きで、おもしろいことが大好きなじいちゃん、農業は1人でやるとすごく大変だけれども、みんなでやれば楽しくできるということで、定年を迎えて、自分のふるさとが荒れていくのが忍びないということで、1人で荒れた田んぼを開墾し始めて、そして、中古のハウスを買ってミニトマトを始めたりして伊折農業生産組合が始まりました。

この下に見えているのは、春祭りのときに、やきとりくんとか、キッチンカーとかを呼んでやってもらったんですけど、集落のみんながこんな大勢いるわけじゃなくて、東京農大のみんなとか、あとキッチンカーをお手伝いしてくれる協力隊の村上さんとか、あずさちゃんとかのご家族とか、そんな感じで、寄り集まって春祭りをしているところです。

私は、今日かけてもらおうとは思っていたんですけど、小谷小学校の校歌がすごく好きで、多分、和子さんがすごくかかわってくれて、谷川俊太郎先生に書いてもらった詩なんです。すごくすてきな歌詞で、

ゆきのしろさに つつまれて
はるのみどりが かくれてる
むかしのみちを きょうもたどって
ふるさとのひび まもっていこう
やまからのながれあつめて
うみへとむかう ひめかわとともに
わたしたち ちからあわせて

という1番の歌詞なんですけれども、2番は、

そらのあおさの そのおくに
うちゅうのなぞが ひそんでる
まなびつづける きょうのむこうに

まぶしいあすを ゆめみていこう
おたりからはじまるせかい
うみのかなたの ともだちとともに
わたしたち ころあわせて

ってすばらしい歌詞なんですね。これをうちの子が小学校1年生は南小谷小学校だったんですけれども、2年生になるときに統合になりましたので、みんなにCDを渡されて、校歌を覚えてということのうちで流していたので、下の娘も覚えたりして。メロディーもすごくすてきな歌詞で、これはほんとうに小谷にぴったりの小学校の歌だと思っています。ほんとうに雪の広さに包まれて春の緑が隠れているのを待っているというところです。

これは生産組合の活動で、私たちは雪中キャベツを栽培しているんですけれども、左の上は雪中キャベツをとった後の写真と、あと、右は雪中キャベツを植えるときに、東京農大の学生さんたちが20人から30人ぐらいかな、20人くらいですかね、来ていただいて植えているところの写真です。今はこんなに雪はないです。背の高さほどの雪を重機で掘って、その後、スコップで掘ってというすごい作業をして、ラグビーじゃないですけど、とったキャベツを手送りで投げて送ったりとか、そりで引いたりとかしている、すごく大変な作業です。

春夏秋冬、春は山菜をとって出荷しています。それから、夏はミニトマトをハウスで2棟して、それも出荷しています。秋はオーナー田をやっています。2014年の災害で田んぼができなくなってしまって、それから4年ぐらいできなくて、去年の春に初めて栽培しまして、オーナーさんがお二組ぐらい、また復活してくれていますけれども、この稲刈りの写真は農大の子たちですね。その上の写真、真ん中と左の写っている写真の一番左の彼が青木君とって、農大卒で地元のJAに就職しまして、真ん中の子は瑞季ちゃんといって長野県の県の職員で林務課にいて、今、飯田のほうにいるんですけれども。ちょうどきのう、結婚式が東京でありまして私も行ってきたんですが、農大生通りという感じで、農大生は、武生先生、今、教授になられていますけれども、2011年から来ていただいて、そのおかげで、ほんとうに歴代の農大生たちと、みんな、仲よくさせてもらっていますし、OBやお母さん、お父さんたちも来ていただいて、8年目9年目になるところですね。青木君たち夫妻はうちの隣に引っ越してきましたので、お隣さんになりました。

先ほどの冬の雪中キャベツです。

それから、私は、NAGANO農業女子というのに入れさせていただいてまして、一番下の絵がNAGANO農業女子のメンバーと銀座NAGANOでイベントをやったときの写真ですね。

それから、大北の農業女子もやっています、いろいろな子たちに入っていて徐々にメンバーも増えている感じで、松川から小谷までみたいな感じで、みんないろんな勉強をしたり、交流をしたりしています。

それから、一番上の左のほうは、女性農業者次世代リーダー育成塾というのに、2017年、参加させていただいて、これは六本木のヒルズマルシェで勉強の一環として出店させていただいたときの絵です。全国の農業者の女性たちがいたので、去年、棚田サミットは行けませんでしたけど、山口の子で牧場をやっている子とかがいたので、ほんとうは去年行きたかったんですけど台風で行けなくて、佐賀のアスパラ農家さんとか、いろんな人がいます。

農村生活マイスターという、長野県の40歳以上の農業女性の集まりに入れていただいています。そこでは、保育園や小学校に小谷のメンバーで、やしょうまづくりに行かせてもらっています。左の上のほうがやしょうまづくりを子供たちに教えているところで、左の下がやしょうまですね。

巻きずしの講習会とかもやっていますし、それから、農村生活マイスターできらめきコンクールというのがありまして、そこでJAのJA表彰というのをいただいて、そこから全国のほうに男女共同参画の優良活動表彰に応募していただいて、次世代リーダー部門ということで農林水産副大臣賞を、東大の安田講堂で授賞式だったんですけども、受けさせていただくことができました。その賞状が多分右の下の写真です。

ゆきわり草の、左の上がばあちゃんたちと、私の隣にいる子も移住者ですが、写っている写真、これはオープンときの写真ですね。ばあちゃんたちも、だんだん元気がなくなってはいないんですけど、やっぱり年になってきているので、若い人もいっぱい手伝ってもらわないと大変な感じになってきています。

それから、農村体験ということで、わら細工とか、布草履とか、さっきの摘み取りとか、いろんなことをしているんですけども、いろんなところから、老若男女問わず、布草履をつくりに来て、若い女の子も来ますし、お父さんと息子さんとか、外人さんとか、いろんな人が来ます。

左の下の写真は、今年、泊まっていた中国のお客様で、7泊、泊まっていた

て、喜んで帰りました。

これは、東京にいるよりも芸能人がたくさん来るので、いろいろなメディアに出演させていただいて、右の下が「キッチンが走る！」というNHKの番組に出させていただいて、あと、リッツ・カールトンのシェフさんと杉浦太陽君ですね。その縁で、今、キャベツも豊洲のほうと取引させていただいたりとかということで、今もおつき合いが繋がっている感じです。

それから、もう一つ、私がかかわっているものに、わくわくおたりというのがあります。これは社協の上川美穂ちゃんから声かけさせていただいて、有志、キタムラ時計の北村順二さんと、それから、がったクラブの相澤るりさんと、キッチンカーの村上さんと私ということで、5人のメンバーで始めまして、わくわくおたりいちであったりとか、多いときは100人ぐらい来ましたが、そんなので、村の老若男女が集まるような楽しいことができたらいねということで始めました。

今は、おしゃべり食堂ということで、月1、ゆきわり草で、大体、金曜日の夕方ぐらいに、お子さんの学校が終わってから来られるかなということで開催しています。そこでは、地元のおばあちゃん、おじいちゃんたちに餅つきとかを一緒にやってもらったり、繭玉づくりをしたりとか、大人も500円ですので、フードロスとか、そういうことも考えて、いろんな食材を提供していただいたり、私たちは完全にボランティアということでやっています。

心合わせてということで、これはゆきわり草のオープンのときの写真なんですけれども、ここにはたくさんの方がお祝いに来ていただいています。うちの集落は12軒しかありませんし、20人ちょっとしかいません。なので、よその人たちの力をかりなければ、ほんとうにいろいろできないことは最初からわかっていますので、自分たちだけで何とかしようとは全く思っていません。そのかわり私たちも、何かここでイベントをやるであるとか、何か困ったことがあるとか、何か一緒にできないかなということを私たちもともに参加して、協力して、やっていっているという感じです。なので、これからも村内外、それから、県内外、国内外問わず、老若男女問わず、みんなで守って、農地とふるさとを守っていききたいなと思っています。

そして最初のタイトルの、でえじなもの、というのは、賞をいただいたタイトルが、伊折からつなぐでえじなもの、というものだったんですけれども、それを小谷中で何か、みんなできたらいいのかなと思っています。

以上です。ありがとうございました。(拍手)

【平尾会長】 ありがとうございました。

今、藤原さんからお話しいただきました。この時点で何かご質問があれば、ご質問を受けて、最後にまとめたほうがいいかなと思いますので、この時点で何かあれば。いいですかね。

扇田さん、お願いします。

【扇田委員】 大変すばらしい活動ということで、こういう下支えがあって、こういう活動というのは、観光とかいうくくりになるとなかなか外へ出てこない感じがするんですね。だから、なぜそうなっちゃうのかというのが1点、これから議論する、これはこの間おっしゃったルーラリズムと、武者先生のあれと非常に通ずるところがあると思うので、これを後でまた聞きたいと思いますが、1点、藤原さんがやっていたら、最初に出てきた生産組合ということと、このゆきわり草の交流施設というのは、これは、前者は純粋に民間、個人の、藤原さんの、何ていうんですか。

【藤原委員】 伊折生産組合が全戸加入で、一応、組合になって生産しているんですが、その前提があって、ここ、交流施設を2013年に、10年くらい組合をやった後に、ずっと空き家でぼろぼろ、30年くらい空き家だったので、そこを空き家再生事業ということで再生していただいて、伊折生産組合、それから伊折集落で管理してくださいということで、指定管理を受けてやっている感じです。

【扇田委員】 じゃ、最初に義理のお父様たちがやられたのは、お父さんの個人的、藤原家というのかな、の事業ではなくて、もともと生産組合としてやって。

【藤原委員】 そうです。

【扇田委員】 だから、売り上げとか、そういうのは、その組合に入っていく。

【藤原委員】 そうです。

【扇田委員】 わかりました、どうも。

【平尾会長】 ありがとうございました。

私もすごい活動をされているんだなと思って、改めて感心したんですが、多分、こういう活動そのものをこれからどういうふうに情報発信していったらいいのか、それから、先ほどもたくさんNHKのキッチンカーとか、そういう話もありましたけど、ああいうつながりをどういうふうにもっともっと広げていくか、その辺も後でまたちょっと議論したいと思います。ほんとうに興味深いお話、ありがとうございました。

次は深澤さん、よろしいですかね、お願いします。

【深澤委員】 地元委員ということで深澤和子です。よろしくお願いします。

今回、この会に出させてもらって、改めて小谷村の観光を、梅池や地区ごとではなくて、村全体のこととして考えました。また、前年度比ということで考えるのではなく、長いスパンで世の中の情勢とあわせて観光というものを考えました。今までの委員の先生方のお話を聞いて、私的に、ほんとうに私的な意見で申しわけないんですけども、3つの観点でまとめて発表したいと思います。

1番が私的に見た小谷の観光の現状、2番が小谷への移住者という観点から絞った人口動態、これは武者先生のお話からヒントをもらって主観的に考えたんですけど、3番も、小谷的ルーラリズムはもう始まっているのではないかとということで発表したいと思います。

資料をつくってきたので、ごらんください。

1番の小谷の観光の現状というのは、ほんとうに前、平尾先生から言われたように、うちは畳屋なんですけど、畳屋といっても観光業の上に成り立っている、お客様はホテルとか旅館さんが多いので、それで営業に回ったりしている中で感じたことで。スキー場ができたころの民宿というのがどんどん大きくなっていて、スキー人口が増加して泊るところがないというぐらいの人気だったころ、団体旅行が中心の建物にどんどん大きくなっていったと思うんですね。修学旅行とか、ツアー会社さんからお客様が来たりとか、子供の団体さんとか、扇田先生が100人が1泊っておっしゃっていた、まさにそのつくりの建物になっていったというところから、最近は個人旅行に移行してきていて、スキーが大好きな家族はリピーターとか常連さんという形でいらっしゃるだったり、最近はインバウンドということで、20人が5泊という形に移りつつあるんじゃないかなと思います。

見ている中で、それに対応していくためには、お客様の目も厳しくなっているというこの間のお話もありまして、お部屋をグレードアップしないといけない。例えば、2つの部屋を1つにして広い部屋にするとか、エアコンとか、バス、トイレをつくるとか、バリアフリーにしているとか、そういう感じでリノベーションされている宿が最近多いです。

あと、食事内容を連泊される方に対応していくとか、アレルギーの対応とか、メニューを選べるようにしたりとか、ビュッフェスタイルになってきたりとか、夕食なりのB&Bに対応したり、インバウンド向けにベジタリアンとか、最近はビーガンとかムスリムとかの対応も考えてこないといけない時代になってきたのかなと思います。

前に田口先生もおっしゃっていたんですけど、デジタルファーストということで、ネッ

ト環境がないとお客さんは困るとか、予約もネットで予約ということになってきたりですとか、支払いもキャッシュレス対応になってきたのかなと思います。そうすると、だんだん英語のメールとかも来たりして、みんな、対応に困っていたりします。

オーナーさんが高齢化して対応できないという施設も多くて、そういうおうちは今までどおりに営業して行って、それで、だんだん廃業を考えると、販売に出したりとかというふうにされて、毎年毎年、旅館さんの数が減ってきているなということを感じます。

それに対して、対応していける旅館、宿泊の施設もあって、そういう宿泊施設は、思い切ってリノベーションして単価をアップされたりとか、ツアー会社さんのところに頼っていたのを自分で集客するように切りかえられたり、インバウンドに対応するようになったり、すごいなと思ったのは、自分で富山空港まで送迎している宿とか。あと、スノーモンキーツアーとか、自分で運転して連れていっているおうちとか、すごい努力されているなというのを見ます。あと、ロビーのスペースとかで、日本文化体験ができるようなイベントを毎週やっていたりとか、そういう宿もあります。

あとは、独自の宿泊施設の特色を生かして、体育館があるおうちとか、音楽スタジオがあるとか、宿のオーナーさんがツアーガイドするとか、ボードを教えるとか、そういうおうちもあつたりして、そういうおうちはほんとうにそこでしか体験できないコアなファンが常連さんになってずっとつながっていているのかなというのを感じます。

個々の努力がどんどん小谷のファンをつなげて行って、そういうふうにしていけば、小谷の未来があるんじゃないかなというのを感じました。

それから、2番に行きまして、小谷の移住者というところに絞った人口動態、かなり武者先生のパクリみたいな感じですけど、移住の第1世代、第2世代、第3世代というのがあるんじゃないかなと感じまして、第1世代は、昭和40年から50年のスキー場ができたスキー場創成期、スキーが大好きで移住してきた、脱サラして、こっちで商売しようって思って移住してきたご夫婦とかというパターンと、あと、その時代にお嫁さんとかお嬢さんとかに来て住みついた人たちとかが今ちょうど60代、70代ぐらいになっておられて、拇池とか白馬乗鞍とかに多いんですけども、そういう方々はすごい腹が据わっていてというか、皆さん、根性があるって、すごい苦労されたと思うんですけども、やり抜いてこられた方々じゃないのかなと思います。

もし、その年代の人たちが小谷に住めなくなる、小谷を離れざるを得なくなる時があるとしたら、例えば、実家の親の介護が必要とか、自分の健康が続かないとか、子供たち

がこっちで就職しなくて町のほうで就職して、そっちのほうに同居することを選ぶという、そういうタイミングなんじゃないかなと思います。

そして、第2世代が昭和55年から平成10年ぐらいのバブル期から長野オリンピックの時代にブームに乗って移住してきた人たち。この人たちも、「私をスキーに連れてって」のブームで、梅池とか白馬乗鞍、このエリアに移住してきた人とか、お嫁さんとかお婿さんに来た人たち、私もその一人なんですけれども、この年代の人たちは、結構ブームが去って離れていった人たちも多いと思います。

それで、ずっと今も小谷に住み続けている人たちの中で、もし小谷を離れないといけないときが来るとしたら、やっぱり実家の親の介護ですとか、子供の進学に伴って一緒に実家のほうに戻るとかという方が結構いらっしゃるのかなと思います。

もう一つ、特徴的だと思うのが、この第2世代の中に、山村留学で中土に小学生が来ていたんですね。その人たちはスキーが大好きで来ていたわけじゃなくて、里山文化に、こういうのんびりした田舎というか、こういう地域で子供を育てたいとか、学校に行きたいという感じで来ていた人が多いんじゃないかなと思います。

平成18年に中土小学校が閉校したときに山村留学制度が廃止になったんですけれども、第3世代に行きまして、平成21年から総務省の地域おこし協力隊という制度ができて、それで小谷村に地域おこし協力隊の人たちがたくさん移住してきて、その人たちも、スキーが好きで来た人たちばかりでなくて、こういう田舎とか里山とかに引かれて、魅力を感じて来てくれた人たちなんじゃないかなと思います。その協力隊の人たちが3年間の期間が過ぎても残る人が6割か7割、いらっしゃるといことで、それは全国的に見てもすごい高い数字だそうです。

あともう一つ、もと山村留学生の小学生だった子たちが大人になって帰ってきてくれているという、そういう動きがあると思います。その人たちもスキーが好きというわけではなくて、昔、小学生のころにいた小谷の、ふるさととして小谷が大好きでまた戻ってきて、こちらで何か事業を始めたりしている人たちがいます。

あと最後、ここに書き忘れたんですけど、最近は外国人も増えています。外国人はスキーが目当てで、J A P O Wというパウダースノーが目当てで移住してきていると思うんですけれども、小谷村も最近すごく増えていまして、白馬村は、現在、人口の10%が外国人と言われていています。小学校にも各クラスに1人か2人は外国籍の子供がいますけれども、小谷村でも最近は多くなってきて、小学校にもハーフの子がいます。

第3世代の人たちは、ほんとうにスキーだけでなく、前、高山先生が里山って言われていましたけど、小谷のそういう観光資源に魅力を感じて移住してきてくれている若い人たちがたくさんいるということを最近感じまして、ここに小谷の未来があるんじゃないかなと思っています。

今、20代、30代の子供を持つお母さんたちに、インタビューみたいなアンケートをとってまして、どうしたら子供たち世代の人たちが小谷に帰ってくると思いますかとか、あなたがずっと小谷に住み続けるには小谷に何が必要だと思いますかというのを聞き取ってまして、結構具体的に、お金もかけないですぐできそうなアイデアとかももらっているんで、また報告したいと思います。

それから、3番の小谷的ルーラリズムはもう始まっているんじゃないかという、裏ですけども、これも武者先生がおっしゃっていた、地域の分脈をまず読み解くところから始めましょうとおっしゃっていたんですけども、ここはかなりできているんじゃないかなと思っています。

塩の道というところはすごく研究されているし、塩の道祭りは毎年大盛況で、人口2,800人の小谷ですけども、塩の道祭りはいつも3,000人以上の参加者があって、地元の子供たちとか、みんな、何らかの形で参加したり、楽しい思い出を持った経験があるんじゃないかなと思います。塩の道の会の人たちが整備してくれていたり、定期的にイベントを持っていてくれたり、小学校の塩の道遠足というのもあります。あと、小谷学というのは、この前、配っていただいた本になっていたり、小中学校で学んでいるところや、伝統料理は、先ほど藤原さんも伊折のほうで、やしょうまづくりをやっておられるのがありましたけど、おすしとか、農協さんのほうでもお料理教室をやっていて、山菜の塩漬けの、塩蔵とかの、そういう教室もあったかなと思います。そば祭りときのご祭りというのは、毎年、結構、村を挙げてのイベントになっていて、これも毎年大盛況なんじゃないかなと思います。

伝統文化の継承というところも、わら細工とか、ぼろ織りとか、爪かんじき、ほかにもいろいろ熱心にやっておられる方々がいらっしゃると思います。

地域のお祭りも、昔はきっとその地区だけ限定という感じだったと思うんですけども、最近では、一般の人も見に行けるような、大網の祭りも、中土のどんど焼きとか、千国神社のささら祭りとかも、大勢の人が集まっている地域のお祭りなんじゃないかなと思います。

それで、その次の段階の人が集まり場所が集まるという、その段階に結構できつつある

んじゃないかなということだと思います。それが観光の中心だってみんなが思うスキー場周辺だけじゃなくて、旧ネットの人たちというか、古い小谷の人たちがだんだん離れていって、どんどん人が住まなくなっているような地域に移住者の人たちが来て、集まって何か始めようというふうにしていく動きがあるんじゃないかなと思って、そこに書いてみました。

大網のつちのいえ、先日、トチ餅は、あんまり宣伝してたくさん注文が来たらかえって困るとかという話もありましたけれども、私が今やっているグループの中でもそうなんですけど、一生懸命やっても、人数が少ない中でやっているんで限界があって、あんまり大々的になっちゃうと今度は対応できなくなるというので、少しずつしかできないとか、そういう悩みも、みんな、あるんじゃないかなと思います。

ウェルネスとか、道の駅小谷は人気の道の駅だと思いますし、中土のやまつばきは、そば打ちをやったりとか、子供たちも集まるようなイベントとかもやっているのかなと思います。

小谷温泉、雨飾キャンプ場はアウトドア会社とコラボしたイベントをやっていたり、石坂の自然体験村、あと、ぼろ織りの体験場もできていますし、あと、藤原さんたちの伊折、ゆきわり草は先ほどの発表のとおりだと思います。あと、コルチナは、大きなホテルがあって、ホテルを中心にいろんなイベントをされていますし、白馬乗鞍は、去年、木をテーマにした煙木祭りという、キハダ生産組合、その人たちとかと一緒に木をテーマにしたイベントを始めました。梅池でも、白馬観光さんがWOW!というのをつくって、アドベンチャーのほうに力を入れておられたり、自転車ツーリズムに力を入れている方とかがいっぱいいますし、ちょっと手前みそですけども、うちは畳屋なんですけれども、畳のゆるキャラのへりを使った、こういうミニ畳とかをつくってまして、ミニ畳づくり教室というのをやっています。回してください。ちょっと大きいのもつくったりして、これはクリップボードになります。ミニ畳づくりは、体験教室とかもできますし、先日も呼ばれて、ガールスカウトの子たちに、好きな、あと時間があるときにやりました。

畳のへりを使ったグッズも個人的につくってまして、こういうのが販売できないかなと思って、ちくちく自分でつくっているのですけれども、もし、またこういうのが何か、ゆるキャラは白馬の村男ですね。それで、もう一つのゆるキャラが3体いるほうは、小谷のたりたりくんと、おおまびよんと、それと村男です。でも、宣伝が下手くそで、私もほんとうにこういうのをやっているんだけど誰にどう伝えていいかわからなくて、どうしよ

うかなと思しながら家にどんどんたまってきていて、販売ルートがわからないというか、どこに持って行ってわからない。

【扇田委員】 鍋敷きでもいいよ。

【深澤委員】 鍋敷きでもいいですし、写真立てとかでもいいですし、何かものを飾るでもいいし、壁につるすでもいいし、大きさも、大きいのかちっちゃいのか、どんな大きさでもつくれるので。押しピンで何かメモとかをつけるとかもできます。

【扇田委員】 試しに幾らで売ろうとしているんですか。

【深澤委員】 それは5,000円で売ろうと思っていて、ちっちゃいほうは800円です。講師もついて、体験つきで1,500円。修学旅行とかで、前、一回、骨折した子がいて、でも、スキーはできないけど、修学旅行だからみんなと一緒に来たいと言って、それで来て、やることもないので、みんながスキー講習を受けている間の時間潰しというか、何か体験できませんかって言われて、用意したこともあります。

最後にもう一つ、インバウンド向けに私がやっています食旅NAGANOという活動ですけれども、長野市の代表と白馬と小谷とにメンバーがおりまして、長野県に来てくれた外国人観光客に長野の郷土料理や日本文化を知ってもらって、楽しい思い出を持ち帰ってほしいということで始めたボランティアグループです。皆さんにお配りしましたパンフレットを毎年つくってまして、それが9冊目になりますけれども、1から9までバックナンバーを持ってきたんです。毎年、何かテーマを持って郷土料理を紹介していて、最初は野沢菜とか、みそとか、日本酒とか、そばというテーマで、あと、温泉というテーマにしたり、今年のテーマはベジタリアン、ビーガン、ムスリムフードを提供できるレストランを紹介するというので始めました。実は、まだ白馬、小谷にそういうお店があまりなくて、結局、1冊にならなかったのので、エリアを広げて、白馬、山ノ内、軽井沢、松本エリアまで広げて載せさせてもらいましたけど、こういう取り組みはまだまだこれからなんじゃないかなということで、どういうことというふうに逆に質問されるようになって、来年、一回、講習会みたいなものを開催しようかという話にもなっています。

2分ぐらいの動画ですけれども、インバウンド向けのイベントを私たちがやっているんですけど、様子をごらんください。お願いします。両方見てもいいです。両方とも一、二分です。

大町のお琴の先生に来ていただきました。これは小谷で活動している踊地のおばちゃんたちです。私たちは絶対着物を着てイベントをするということにしています。大町のお琴

の先生です。これは、白馬の和田野にあるホテルのロビーでイベントをやらせていただいて、ニュージーランドから来ている女子高生たちにイベントをやりました。最後にはみんなで炭鉦節を踊ります。

ありがとうございました。このときは県の助成金をもらってやっていたんですけども、3年間で過ぎたので今は助成金がなくて、続けていくにはある程度の収入がないとできないんですけども、白馬のHIBAという外国人のグループのところに行って、やらせてもらえないですかって言ったら、どこかで毎日やってくださいって言われて、毎日、こういうイベントを私たちがやるのは無理なので、週1回とかはどうですかって言ったら、それは困るという感じで言われて、いっぱいいろんなイベントをやっておられる方があるので、こういう団体がたくさんつながれば、365日、どこかで誰かが何かイベントをやっているというふうなことができるんじゃないかなと思って。そういう持続可能な地域づくりのために、民の発想に官が乗かっていく形で何かつないでいくようなことができればいいんじゃないかなと思いました。ありがとうございます。(拍手)

【平尾会長】 ありがとうございます。

これまた興味深いお話で、私、1つだけ、協力隊の6割から7割の方々が3年終わった後も残る、それから、留学で来ていた人たちが戻ってくるという話があったんですけど、その人たちは、協力隊が終わった後、どんなことをやられて小谷にとどまっているということですか。それだけ教えていただけますか。

【深澤委員】 ここに人が集まって場所ができつつあるというのが大体協力隊のOB、OGの方じゃないかなと思います。やまつばきにそのまま残っている方、石坂自然体験村を主催している方、自転車ツーリズムの方、あとぼろ織の方、・・・13組。

【平尾会長】 わかりました。これも将来の小谷を考える会にこういう人たちと小谷村をどうつくっていくかというのはとても大事なことだと思いますので。ありがとうございました。

【扇田委員】 大変おもしろくて、僕は、第1世代に当たるんですけど、1つ、これは僕のほうも手前みそになるんですけど、ちょうど日韓のワールドカップのサッカーがあったときに、私のフランスでの友達がジャーナリストをやっていて、ル・モンドに記事を頼まれて、日本らしいところを、京都や奈良や、もう誰でも知っているところじゃない場所があったら取材に行くから教えてくれということなので、塩の道と金沢を教えたんです。日曜の観光特集という1ページ全部がそれに出て、今度、そのコピーを持ってきますけど、

それがあったから外国人が塩の道を歩きに来たとは確認はできないですけど、意外と塩の道を歩きに来る人がいるんですね。去年も、僕のうちだけで4人ぐらい、スペイン、カナダ、アメリカ人なんか塩の道を歩いて、写真を撮りながら来たというのがありました。

塩の道というのは世界中にあるわけですよ。そういう意味でいくと、これが一つの文化になるのかなというのが1つ。それから、日本らしい文化のイベントということの話ですが、例えば、大がかりに大きな旅館やホテルで一つのイベントとしてやっていくというのと、うちみたく老夫婦2人で小さなところでやっていて、最近、ここ四、五年、気づいたのが布団を敷くというのが非常に喜ばれるんです、敷き方。

というのはどういうことかという、布団には寝たことがある、旅行へ行くと大体部屋に布団が敷いてあって、ただそこに寝るといのはわかると。実はねって言って、例えば、マットを1枚と布団1枚、それから、マット2枚と布団1枚、それから、布団だけ2枚、布団だけ1枚、つまり、あなたの好きなやわらかさ、かたさで寝ることができるのが布団文化なんだというふうに言うと、ものすごいびっくりするんです。これは、考えてみたらそう、ベッドでマットがやわらかい、マットがかたいベッドぐらいのあれはできるけれどというふうにやって、僕も最初、気づかなく、これは絶対イベントになるなって思って、それからやっていると、ほんとうにみんな、喜びます。

これが小さいところで畳んで、それで、ここにちゃぶ台を出すと、ベッドルームがリビングルームにかわるんだとかね、そういうふうにやっていくというのをやって、だから、イベントというのは、何も大がかりにやる、これも重要だし、もう一方で、素朴にやっていける、長続きするというのも、両方考えていくとおもしろいこともできるんじゃないかなと今、僕はそれは深澤さんの畳というのが日本文化でだんだん洋室化していった個人の畳の需要が少なくなっていくというときに、僕が勝手に思っていて、そこを聞きたいんだけど、旅館や、そういうところに営業の目線を見つけたということは、僕はすごい発想の転換で、これは小谷村全体に、スキーだからスキーの旅館というのじゃなくて、もっと違う発想の仕方ですごくおもしろくできるんじゃないかなという、その辺を今度、聞かせてください。ただじゃだめかな。

【平尾会長】 それでは、ほかの方。

高山さん、お願いします。

【高山委員】 イグサは、多分、国産だと熊本しかないと思うんですけれども、そうになると、外国から来る、中国だと思うんですが、さっきの材料ははぎれを使っていっしょ

と思うんですけども、それはいいんですが、やり方として、地域の物質循環という意味で、休耕田で、ソルガムという植物があるんですよ、昔で言うコウリャン。それで畳をつくれます。だから、休耕田でそういうのをつくって、ああいう　　をつくるというのも一つの方法です。

それから、キハダ生産組合、多分、生薬として出していらっしゃるんですか。

【深澤委員】　　はい。

【高山委員】　　これ、非常に重要なものですから、私もプレゼンのときにあんまりお話しできなかったんですけど、これは非常に貴重な資源になると思います。

【深澤委員】　　ありがとうございます。

【平尾会長】　　ありがとうございました。

それじゃ、次、田原さん、お願いします。

【田原委員】　　田原です。よろしくお願いいたします。

前の2人の方も、これからやられる方も、時代おくれの私はデジタル化ができなくて、プロジェクター等を使うのができないんですけど、レジュメみたいなので、これを見ながらやっていただければと思います。よろしくお願いいたします。

タイトルに出したのは、緑と雪と温泉のふるさと、信州の小谷というのは、小谷村のキャッチフレーズというか、これをやっております、私は、これが一番小谷村の肝だと思っておりますということを踏まえた中에서도小谷の観光を考えていく上にはということなので、出させていただきました。

まず、1つ目は、これは私がいつも誇りを持ってお客様には話をしているんですけど、こんな小さな村でありながら、2つの国立公園を持っていること。すごい自信を持って言える村だと思っております。

1つは、上信越国立公園から分かれて、32番目の妙高戸隠連山国立公園になったところに、雨飾山を含めたものがあって、極端に言えば、一部ではありますけど、国立公園には違いないので、自慢していい山だと思っています。

それで今、その下にも書いてありますが、メインである梅池から白馬へ登る間の、特に天狗原までの間、それから、雨飾山でしたら、特に小谷温泉側の小谷温泉から荒管沢、荒管沢から笹平へ上がるまでの間、特にこの2カ所の登山道の荒れたのはほんとうにひどくなってきておまして、私たちも補助金をもらいながらやっているんですけど、組合員というの、うちの会に45人ちょっとしかいませんので、なかなか難しいところがあるので、

抜本的に考えて、しっかりとした整備をしないといけないんじゃないかなという事は思っております。

それと、このごろの登山者のお客様は年齢の高い方が多いです。冬がメインですけど、インバウンドで来られている外人の方々、特に、バックカントリースキーへ行く人たちがいます。そういうことの中で、小谷からの山域の中では携帯電話が使えないところが非常に多いんです。特に、稜線まで出ればいけるけど、くぼ地というか、宿泊施設もいっぱいある白馬大池、それから、風吹大池、それから、雨飾山の駐車場近辺、雨飾高原のキャンプ場周辺、この辺も全く使えません。それと、先ほど言ったバックカントリーの外人の方たちは、事故を起こすのがものすごく多くなってきております。それと、年齢の高いお客様が登山中に事故を起こしても、携帯が繋がらないという状況がありまして、今、登山客、ほとんど携帯を持っておりますので、何とか無線の整備をやってもらうようなことをお願いしたいかなということも常々考えております。ぜひ検討していただければと思っています。

あと、学校登山が今、全国的にというか、県内でもそうですけど、学校登山が非常に減っておりますので、これは私たちが啓蒙していかなきゃいけないんですが、生徒、児童さんに山の魅力をもうちよっと広げていかなければいけないかなとは思っています。それが減ってきたということ、イコール、冬のスキー修学旅行も極端に減っております。ですので、ここら辺も夏冬を兼ねて、問題を掘り起こしていかなければいけないんじゃないかなと考えております。

それから、深澤さんもおっしゃられましたが、塩の道は整備されて、ほんとうに村も力を入れて整備していただいているし、来てくれるお客さんは、舗装道路のない道ということが一番の小谷の魅力で、これが一番長く歩けるといのがすごく魅力だということでお客さんに聞いておりますので、これは、このまま、ぜひやっていきたいと思っております。

私が1番目に、一番お願いしたいというか、言いたいというのは、次の項目でございまして、村の86%が森林域、原野域となっております、わずかに耕作地は1.何%ぐらいしかございません。ですが、これを皆さんも感じているとおり、村も感じておりまして、それから、森林セラピーとか、巨木ツアーとか、山菜とりツアー、先ほど石坂やったか、自然体験学校等々をやっておりますが、まだまだ利用価値があるのではないかなと思っております。

特に、スキー場開発が盛んにやっただけでこられた姫川を挟んだ西側地区はかなり開発が

されてきておりますが、私は東側に注目して見ていただきたいと思っております。一番の売りは、東側方面から見る北アルプスの風景だと思っております。前回だか、小谷の冊子を出してもらったときに、眺望の里という表紙の写真があったと思いますが、あの流れが東側はずっと見られます。

その一例ですが、今の小谷小学校を建設したときに使った用材を切り出した地区が土谷地区、奉納地区の奥にありまして、菱ヶ平というところですけど、標高がここは約1,100あるかないかぐらいでして、眺望は、糸魚川方面は無理ですが、風吹山からずっと、南は爺ヶ岳のその先まで見えるところがございますので、そこにも書いてありますが、小谷というか、簡単に言って、3カ所の槍ヶ岳が見えるところは私はここだけかなと思っております。白馬鎗ヶ岳、鹿島槍ヶ岳、本槍ヶ岳が見えます。

それから、この間の地震でもってちょっと崩れてしまいましたが、東山林道を春夏秋の散策というか、ハイキングコース等にも使ったり、冬のスノーシューコースに使えます。この東山林道も眺望は大変すばらしいところだと思っておりますので、考えてもらってもいいかなと思います。

それから、土谷地区の曾田の上部の辺から入っていく道がつくれるんですけど、中谷側と土谷側を挟んだ尾根と思っていただければいいんですが、この尾根をたどっていくコースも考える中には1つ、入れてもいいかなと思っております。

大網地区の真那板山、梨平地区上部の岩戸山等々も大変すばらしいトレッキングやスノーシュー、バックカントリースキーにも使えると私は思っております。

その次に、戸隠講とか善光寺講というのが、南小谷の地区の皆さんはあんまり、私も調べていなくて申しわけないんですが、中土地区、土谷地区にはございまして、東山を越えて戸隠や善光寺へ行った道があるんです。

もう一個書いた六左衛門という道は、小谷温泉の雨飾の脇を越えて、糸魚川の早川谷まで行く道、自分たちも行かせていただいたんですが、先ほど言った戸隠講、善光寺講等の道中の道もさかのぼるといって、たどってみるのもまた一つの違う東山の魅力を見せられるんじゃないかと考えております。

それから、乙見峠から堂津、中西と書いてありますけど、これはまだずっと東山、黒鼻でいけば、白馬の青鬼の上部を通過して白沢トンネルの上まで行きます。ここまでは言わないんですけど、乙見峠から中西山まで登山道を切り開いていけば、鬼無里地区の皆さんが裾花の奥から中西山の、こちら小谷側から見て、すぐ裏まで道が来ております。ですので、

これはまた周回登山道になるんじゃないかなと思っておりますので、これも考えて、そこへ行ったときに、小谷三山というのも小谷の皆さんもあまり知らないかもしれませんが、この中西山、東山、黒鼻山というのが小谷三山と言われている山ですので、こういうところも案内できればなと思っております。

こういう夏季というか、無雪期には、行く道はどうしても、ある程度決めたところしか行けませんけど、特に冬のスノーシューについては、ほんとうにコースは村内、無限にあります。ただ、危険箇所もあるので、もちろんガイドをつくっていくのは必須ですけど、無限のコースができるので、これはぜひ小谷村の中のスノーシューというのを考えてもらえればなと思ってます。

今年の冬のように、雪不足、それから、夏でしたら、長雨、冷夏というような気象条件が非常に厳しいのが自然相手の仕事、もしくは商売だと思っておりますが、やはりそれに対応できるような策をまた考えていって、克服とは言いませんが、お客様にも自然というものはこういうものがあるんだぞということを体験していただくのも一つの策かと私は思っております。

次、2番目でございます。

これは、ガイドでもって、山岳ガイドやら、塩の道、また、里山等で行ったときに、何もなくなったようなときに話をした中で、お客さんに喜んでいただいたことを挙げてみました。お客さんが一番、話をする中でもって、喜んでいただけたのは、地域の生活を聞きながら話しているのは多かったです。ですので、ここに挙げてあるのは、お客さんとの対話の中で感じたことを挙げた中で選んだというのは語弊がありますが、そういう感じです。

小谷村は南北に長くて、言葉遣いも、それから、風習も、みんな違うことがあるので、その中でもって、もしそういうチャンスがあったときに、お客さんに喜んでもらえるには、都市部の人たちの交流をやっている中に、小谷のちょっと古い、田舎事を含めたものが一番よかったし、また、自分の公民館、分館の役員なんかもやらせてもらったときに、交流を持ったときに思ったことですので、ぜひやればなと思ってます。

それで、そこに①のところの行事なんですけど、例大祭というか、普通の秋祭りの氏子が集まるお宮はどこもやっているし、これはまた家へ帰ってくる親族の皆さんたちやら、普通の一般の観光客も大勢いるかと思いますが、今、どこもそうですけど、人手不足ですので、こういうことに参加しませんかという呼びかけもいいのかと思います。

私が一番やってみてもいいかな、おもしろいかなと思うのは、そこに書いてございます

が、庚申講、戸隠講、山の講、秋葉様とか、十二社こういう講のときに、講のときに呼べれば一番いいんですけど、こういう講のときにはこういうことをやる、こういう食べ物でやって、皆が寄り合って話をするということをよその人にも知ってもらいたい。中には、こんなことがあるのかというようなものを見てもらうのも一つ、田舎の人では全然おもしろくも何ともないんですけど、おもしろいかなと思っています。

それから、年中行事のほうですが、これはどこでも大体あるかと思うんですけど、でも、小谷には小谷のものがあって、正月じゃなくて、私はその下に小正月、15日のことを書いてありますが、これもいろいろいわれがあります。11日に若木迎えというのは、道祖神をつくるクルミの木とか、だんごをさすミヅキというか、だんごの木というんですが、そういうのやら、十三月のときに使う、うちのほうで言えば、ガヤの木というんですけど、そういうものを11日にもらいに行くと決まっていて、行ったときには米を進ぜるとか、昔はお金を進ぜるとか、そういうことをやって、山の神様、ありがとうございますという言い方をします。

14日には物づくり、物づくりというときに、道祖神をつくったり、十三月のものをつくったり、俵とって、俵とって、ほんとうに巻き俵なんですけど、12月のうちにやるわらでつくる巻き俵じゃなくて、ほんとうに木の巻きの俵をつくります。それから、高男というのは、せいの神というか、どんど焼きのときに使って、ものすごく長い木の上に、十三月の大きなのに男の人の顔を書いたものに、先ほど言ったガヤの木を巻いたようなので、いわれはまた後で言いますが、そういうようなものになります。

15日の日のせいの神の後、鳥追いをやりますね。鳥追いは、こっぴという昔の雪をおろす道具ですけど、それをたたいて鳥追いの言葉もあるんですけど、そんなようなことがあるというようなことを年中行事でもって、それぞれの季節季節に行ってやれば、またおもしろいというか、お客さんにはわかってもらえるし、また、道祖神とか、十三月とか、そういうものをつくってもらうのもいいかなと考えております。

先ほど言ったガイドをしているときの話の中で、自分の子供時代や、また、親やじいさん、ばあさんたちから聞いたときの話がお客さんには興味をもってもらえました。そういうときの話も、生活の話が一番聞きたがっていました。例えば、養蚕のような話だったら、桑とりも、蚕がちっちゃいときはこういう葉をくれなきゃいけないとか、だんだん大きくなるとこうだとか、それからウラタテという言い方は……。そういう蚕のふんがたまったのを、蚕のくそですね、蚕糞というんですけど、それを買い取りのような、産業のような

ことを言えば、ほんとうによく聞いてくれます。そんなようなことを話していく中ではやってもいいかなと思います。

その次の里山の散策ですが、だんだん高齢者の方たちが標高の高いところから下へおりてくるようになったときに、先ほど言った塩の道もありますが、私は、その今書いてあるようなところもいいかなと思っています。もちろん、阿弥陀の薬師様や石のほくらめぐりもそうですけど、地名、ののしろ、これ野城ですけど、これは戦国時代のみんな流れて、これは野城、次のはこっちの言葉ではていしょんじ（大将陣）っていいいます。あとはそのままですけど、こういう地名のあるところへ連れて行って、こういういわれがあるんだという言い方をしてもいいかと思っています。塩の道の深原（フケラというんです。）、フケラのほうに行けば、いろいろな地団駄とか、地名があるんですけど、そういうのと同じように、そういうところもいいかなと思います。きつねづか（狐塚）だとか、うまとりくぼ（馬取窪）とか、ちとりば（血取場）とかって、いろんなのがあるので、それもいいかと思いません。

あと、伝説のところ、稗田山にも伝説はありますし、お善鬼様（オゼンキサマ）それから、梅池のほうにあります神の田んぼ、これもいろんないわれも流れもありますので、聞いてもらいたい。

小谷では、堰、用水路、これも歴史あるのがありますし、明才堰というのは、今、全然使っていないといけないんですが、これも良いいわれがあるので、話を聞いてもらいたいし、黒川も、伊折も堰があったのかな、復活したんだね、すごいお金をかけて。伊折もありますね、土谷堰にも、松本からこっちでは一番古い堰だと言われていまして、そんなのも見てもらうのもいいかと思っています。

先ほど、藤原さんも言っていましたが、体験をやってもらうので、私が挙げたのは、そんなようなことで、あと、まだその上に、猫つぐら、みの等、ありますけど。それから、スッペンジョーとか、わら靴等もありますが、そういうのまでいかななくても、やってもらえばなと思っています。

先ほどの里山の散策等の中で、自然の中の遊びというのも一緒にやっていけばと思っています。山での道具、道具というのは、なたとかのこぎりの使い方、要は、ササを使ったコップとか、こういうもの。それから、ホウ葉の風車、これは年配の人はみんな知っていると思うんです。それから、タカバとか、あれは何だろう、タカバの笛。

イタドリをタカバっていいいます。それとか、笹竹の鉄砲、これはマユミの赤くなった実

を詰めて、ぱんぱんってやるんですけど、そんなようなこととか、グライダーなんかもできます。グライダーというのは、山菜の伸びるやつ、何だったかな、ゼンマイを飛行機にするんですけど、そんなような遊びもしながら、里山歩きは楽しめますので、ぜひ、やればなと思っています。

最後ですが、そこに挙げて、読んでいただければと思いますけど、特に今、挙げまして姫川より東側の地区のほうは観光を直接やっていないんですよ。梅池の皆さん、白馬乗鞍のほうの皆さんのように、それをしっかりとしたりわいとしてやってこなかったものですから、手伝いには行っても、自分のところで経験がないものですから、急激な変化にはなかなか、もう来なんですよというような意識を持つ年配の方たちもおりますので、そこら辺のさじかげんといいますか、配慮していかなければいけないかなと思っています。一番嫌がるのは、見られるということと、すごく聞かれるのが嫌らしいです。それと、おばさん、これちょっといいとか言って、トマトとか、キュウリとかがあると、ああ、持っていけ、せいぜい二、三本とっていると、ほんとうに全部、そっくり持っていくそうです。草花も、きれいなのをあれらは全部持っていっちゃうもんで、そういうことも、モラル的なことも含めて、検討を、やるときには考えなきゃいけないかなと思っています。

済みません、全然まとまらない話で申しわけございませんが、よろしくお願ひします。ありがとうございました。(拍手)

【平尾会長】 ありがとうございます。

これまた議論しなきゃいけないなと思っていたのは、先ほどの景観の話、東山から見た景観、そういうところ、どこがいいポイントになっていくか、そこまでどういうふうにして行くのか、道を楽しみながら、なおかつ、景観を楽しむということがものすごくこれから大事になってくるとお思いますので、その辺はこれからの観光資源の再評価みたいなところでも十分議論していかなきゃいけないなと、思いました。

それから、ほんとうに行事とか、里山の散策とか、体験とかって、これはみんな小谷学に通じる、最初、田原さん、冒頭もおっしゃったとおり、みんなこれは小谷学に通じるようなところもあるので、また小谷学を深掘りするときに、またぜひ、さらに細かくいろいろ教えていただければと思います。

委員の方々から何かあれば、よろしいですか。じゃ、また総括のところでお願ひします。次、今井さんお願ひします。

【今井委員】 委員の今井頌治です。よろしくお願ひいたします。

長野県の最北西部に位置する信州小谷、雄大な北アルプスに囲まれたこの村は、峡谷型の地勢で、まさに里山にある小さな谷の村です。村には54の集落が点在し、約3,000人の村人が暮らしています。自然に抱かれ、強く優しく生きる小谷人に出会えば、人生を豊かにする貴重な時間が過ごせるはずです。

本日は、人々の思いをテーマとし、労働人口と事業規模をキーワードとしまして、観光地域づくりの提案を申し上げます。

図は、小谷村の月別人口推移です。左の縦軸は総人口、横軸は2019年の1年間の人口推移をあらわしています。どうでしょうか。小谷村は12月に赤ちゃんがいっぱい生まれますというデータではございません。人口全体では1月の2,990人をピークとし、冬季観光の12月から3月の途中まで2,900台後半を維持しています。

次の折れ線は日本人の人口です。日本人は、進学、就職で3月に22名減となり、4月で主に就職で帰って来たりして8名増えています。あとは自然減で、緩やかに減少しています。

右の縦軸は外国人人口です。村の人口がこの1年間で増えたり減ったりする要因は外国人人口です。冬季は150人余り、住所登録し、春に一気に減り、100人を切ります。グリーンシーズンの6月から10月まで若干増えた後、12月に一気に増えます。ほとんどの人が小谷の観光事業にかかわっているとっていいと思います。この12月に200人を超えたのは、昨年の日本人の季節従業員の採用に苦勞し、その反省から外国人労働者を多く採用したのではないのでしょうか。1年間で5%も人口が増減する地域も珍しいと思いますが、まだ住民票を持ってこない季節従業員もいると思います。となりの白馬村もそうですが、冬季期間の人口はもっと多いはずですよ。

長野経済研究所さんのアンケートに協力したところ、どうぞといただいたデータですが、長野県全体の2019年3月末の従業員数です。従業員数を規模別に見ると、21人から50人以下が37.3%と最も多く、50人以下の企業が全体の52.5%を占めていました。

それでは、小谷村の従業員数で65%を占めている宿泊業、建設業の従業員数について検証します。2020年1月末のデータで、宿泊業142社、建設業26社、計168社のデータをまとめてみました。図のように、101人から300人以下の宿泊業は1社、51人から100人以下の宿泊業も1社、21人から50人以下は宿泊業で2社、建設業2社、計4社となっています。残りの162社は1から20人以下で、全体の96.4%

と、小規模事業者がほとんどという状況です。長野県全体の50人以下の企業が全体の52.5%を占めていることと比較してみても、村は小さな会社の集合体であることがわかります。

建設業の従業員は冬季観光に携わります。そこで、建設業からどれだけの人数が冬季観光に携わるか調べてみました。ちなみに、除雪業務は夏場になく、大事な観光等の道路維持にかかわることで、このジャンルに入れました。表のように、除雪業務に53人、スキー場のスキーインストラクター、圧雪業務、リフト業務に27人、宿泊業に11人、飲食業に6人、その他というのは、長野県スキー連盟にお二方の方が出向しております。建設業の従業員266名のうち99名の方、約4割近くが冬季観光に携わる形となっています。また、小規模事業者がほとんどですから、個人経営の代表者の方々も数名、かかわっている状況です。建設業界は1人で型枠を組む、鉄筋を組む、重機を運転することができる人を多能工といいます。

小谷村では、地元育ちで、夏場は大工をしながら、冬場はスキーのインストラクターといった多能工といった職種の人があります。逆に、東京や大阪育ちでスキーにはまり、スキーのインストラクターをしているところ、1年中ここにいたいということで建設会社に勤めるといった方々も多く見てきました。12月から3月という4カ月に集中する冬季観光を支える従業員の確保にとって、多能工は重要な職種となっています。

ちなみに、北アルプス地域振興局主催で、人手不足を解消するために冬季に北アルプス地域のスキー場等で従事している季節雇用者を対象に、春から秋にかける県内の仕事を紹介するという雇用マッチング仕事説明会を今月下旬に開催予定です。この人たちの1年中、この地に残り冬季観光に勤めたいという要望に対し、現在は建設業が夏場の主な受け皿となっていますが、新たな業を起し、夏と冬季観光と、違った業種で働く場所を増やす必要性が求められています。

小谷村には142の宿泊施設があります。梅池は全体の56.3%を占めます。白馬乗鞍は全体の33%で、2つのスキー場で9割を占めています。梅池には、従業員二十数名の規模で2施設、白馬乗鞍は70から80名規模で1施設ありますが、残りの124施設は、数名の家族経営の施設です。括弧は外国人経営者でございますが、まだまだ13施設と、それほど多くはございません。

今年のように、地球温暖化の影響で、スキー場下部では、小雪によりスキー場の経営に影響を与えています。今後スキー場のリフトのかけかえや降雪機の設置に2分の1、国庫

補助が出るようですが、雪質についてこだわりたいか、今より上部にスキー場を延長した
いかを索道事業者の方々とともに検討する時期ではないでしょうか。

環境保全の取り組みとして、今もピーク時のままのスキー場の面積、特に、横幅を縮小
するといった考え方はできないでしょうか。ふるさと納税の返礼品として、スキー場に木
を植えることはできないでしょうか。環境問題に寄与するうたい文句で、小学生にも植え
てもらいたいと思います。新商品になる可能性を感じます。

宿泊施設をリノベーションする必要性があります。現経営者でリノベーションする方法
と、M&Aでリノベーションする方法とがあります。リノベーションする場合は、体力が
要ります、お金が要ります。M&Aの場合、企業支援として村では手厚く支援をしていま
す。現経営者の場合や後継者の場合、住宅リフォーム事業で宿泊施設も追加し、手厚く支
援する必要があります。M&Aのものの経営者には、引き続き村内に残って暮らしていただ
くよう支援する必要もあるのではないのでしょうか。

家族経営の施設が多いことから、昔からおばあちゃん、お母さん、おかみさんと言われ
た人たちが活躍していたことは想像理につきます。宿泊施設の女性たちがつくった料理は
格段の進歩があります。フレンチにイタリアン、田舎料理と、味もそうですが、バラエテ
ィーに富んでおいしいです。さらに磨きをかけるべく、著名な料理人を呼び、地元の食材
を使った、例えば、山菜、茶の子、雪中キャベツ等々の新メニューの勉強会とか、週末は
〇〇の日とか、お客さんに食べていただくことで地産地消を進めていただきたいと考えま
す。

地域活性化とカヤ場をキーワードとした動きがあります。前回、カヤ場が燃えている写
真をちら見したわけではございますが、村内にはカヤぶき職人の会社があります。会長さ
んは、前回の伊勢神宮の遷宮の建築のカヤぶき職人として参加しています。この先、どん
な展開があるかもしれませんが、カヤぶきの屋根といえば、古民家も一つの選択肢に含ま
れます。

塩の道祭りには3,000人を超える人が集まります。多いときには4,000人を超え
ました。なぜか。そのわけを解析する必要があると思います。お客様が来るからきれいに
するのか、きれいにするからお客様が来るのか、塩の道と林道の草刈りを徹底しませんか。
新潟県境から白馬村境までの塩の道。雨飾山の麓の笹野から湯峠、林道東山線、林道西山
線の草を刈ってきれいにしましょう。林道沿いの未開地を世に出しましょう。小谷の人には
見なれた田舎の風景も、よその人には心を癒やす風景です。ウォーキング、サイクリン

グ、トレイルラン等々を使った新しい商品開発をしましょう。

高山先生から提案のありましたジオパークですが、糸魚川ジオパークのジオサイトに姫川溪谷があります。糸魚川市の葛葉峠自体が小谷村の姫川右岸の真那板山から崩壊してたまった固まりだと言われております。また、山間地のジオサイトとして、深田久弥さんの久恋の山として紹介されています雨飾山も小谷に含まれます。

糸魚川ジオパークは24のジオサイトで構成されていますが、2つのジオサイトと小谷村が隣接していること、ジオパークの要件で、小谷村から発見されている恐竜の化石を足すと、糸魚川ジオパークは何と100%の要件を満たすことになると言われております。ここには研究の余地があるかと思えます。

雑学で、右下に19足す63と書いてあるんですけど、これは雨飾山の1,963メートルに関係がございまして、十九銀行さんと六十三銀行が合併いたしまして八十二銀行が生まれたということで、白馬の支店長さんからアピールしておいてくださいって言われたんですけど、八十二銀行の行員の方は、結構、この雨飾山が有名で、上られるそうです。

ちなみに、i m a i ハイフン1963って書いてあるんですけど、私どもの会社は雨飾山の麓で創業をいたしました。また、今井工務店と改称したのが1963年ということで、i m a i ハイフン1963という形で利用させていただきます。ちなみに、i m a i でホームページ、アタックしたんですが、もうなかったですね。ホームページのアドレスとしては先にとった者勝ちですので、そんな形で利用しております。

おとし、雨飾風呂、天然温泉のお風呂を新築しまして、お風呂へ入っている人は、この間までと違って、今、小谷のトイレは気持ちいいって言っているんじゃないかなって、想像の絵でございまして、公共施設のトイレは和式を全部洋式にかえて、きれいにお客様を迎えればと思っております。

昨年の暮れですが、リピーターのお客さんに、今年はまだ雪質がよくないから泊まりに来なくていいよって電話するおやじさんがいたそうです。人々の思いを大切に観光地域づくりを進めていただければ幸いです。昔からの小谷のキャッチフレーズ、雪と緑と温泉のふるさとをご紹介し、終わりいたします。ご清聴、ありがとうございました。

(拍手)

【平尾会長】 ありがとうございました。

いろいろな統計を出していただいて、非常に勉強になりました。そのほかのリノベーションの問題、それから塩の道、マップのご紹介もいただきました。それから、ジオパーク

をもう一度見直してみたらという、これは地域資源の一環ということで、非常に重要なお話だと思います。ジオパークもそうですが、ガイドマップの中に、先ほどの田原さんのお話にも絡むんですけど、ビューポイントをしっかり入れていくようなところも必要になってくるんだろうなと思いました。

何か、お願いします。

【田口委員】 今の人口というか、就業人口の月別の移動ですけれども、あれはどこでとられているんですか。特に、スキー場に従業員の、あれだけの数って、なかなか表に出てこない数字ですよ。

【今井委員】 26社、全部に聞き取りをしまして出した数字です。宿泊施設に関しましては、商工会のほうで調べたというデータです。人口につきましては、小谷村の1階の、入ってすぐに丸いテーブルみたいなのがありますね。そこに幾つか、5つのデータが掲げてありまして、その左の奥が毎月の人口ということで、1月末は2,992人ということで、あと8人で何とか3,000人を超えるというところだったんですが、2月、まだチャンスがあろうかなと思うんですけど。

以上です。

【扇田委員】 おもしろい話、ありがとうございます。

さっき、植樹を逆にしてという提案が出されたんですが、これは大変、僕、おもしろい提案じゃないかと。というのは、木学、切るのは何十年先の話ですけど、今、住友林業なんかが中心になって、東京にというか、300メートル級の木造ビルをつくるというようなプロジェクトが行われて、そのきっかけになったのがこの間の、今度、東京オリンピックのメイン会場になる、このごろ。だから、木を使った大型の施設をこれからつくっていくと、そこの一つの考え方は、木材は30年50年たって、取り壊したときに、その次の建設資材になるという。つまり、その間、木材を保存するという考え方があると。これは古民家に通じる考え方の一つということで、そういうのにあわせて、多分、30年後にもものすごい木材の需要が増えていくということを見越した上での植樹とか、木の利用、それで、もう一つ、先ほど、畳のあれが出ていましたけれども、そういう小谷ならではの地場産業のつくる原資材をそこでどういうふうにつくり上げていくかということも含めてやっていくと、これはすごくおもしろい話になっていくんじゃないかなと思いました。

それと、こんなすばらしいものを、さっき聞いたら、証拠に残って生き恥をさらすようなことになるから、あえてこの資料をコピーしなかったとおっしゃっていましたが、こ

れ、村役場で僕たちを含めて、この資料欲しいので、印刷していただけますか。

【事務局】 はい。

【平尾会長】 ほかは何か、武者先生、よろしいですか、何かありますか。

【武者委員】 いいです。

【平尾会長】 それじゃ、ありがとうございます。

じゃ、最後になります、猪股委員、お願いします。

【猪股委員】 猪股です。よろしくお願いします。

私は、地元が梅池高原のスキー場ということで、観光ということで1年通してのことを、皆さん、すばらしいのを見せてもらったんですけども、スキー場に特化して、冬シーズン、僕もスキー関係をずっとやらせていただいていた、スキーで大きくなった人間なので、小谷村の観光というのはスキーをベースに発展してきたんじゃないかなという思いから、スキー場をメインとしたDVDを、過去のものからまとめまして10分ちょっとのものになっていると思うんですけど、大体昭和43年から昭和63年までを少しまとめて、皆さんに見ていただきながら、感想なども伺いつつ、今後のスキー場の発展に、少しでも皆さんからヒントをいただければと思ってつくりましたので、ごらんください。

早送りとかもできますか。できないですか。

最初は、昭和43年のものですが、協力が、何とコカ・コーラボトラーズがやってくれています。何で昭和43年から選んだかという、僕が生まれたのがちょうど昭和43年なんですね。3月生まれなので、このころ僕は生まれていないんですね。

多分、これが梅池の当時のスキー学校の練習風景です。この中に私の父もいますので、このとき、僕はまだ母のおなかの中にいたんだと思います。

この資料を見ながら当時の人たちに話を聞くと、これだけの人数がいるのは全て地元のお父さんたちだったということでした。なので、こうやってスキーに乗って遊んでいる間、お母さんたちは、一生懸命、宿で働いていたんだと思います。

これが当時の梅池スキー学校だったらしいです。

これが梅池のメインの鐘の鳴る丘のゲレンデですけども、今と全くレイアウトが違って、リフトの数も違えば、地形が僕の知っている鐘の鳴る丘とは全く違います。

支柱のところにこれだけ雪があるというのは、当時は相当雪が多かったんだというのは、見せてもらいながら感じております。

これが当時の大系線で、白馬大池駅です。道路のレイアウトは若干変わったんですけど

ども、いまだにこの道路は白馬大池からこちらへ向かう道路、この映像はやらせじゃないかなと思っているんですけど、昭和43年、こんなだったかなと思っちゃうんですけど。

これが今ある梅池の越戸峰というところから一望できる景色ですけれども、いまだにこんな感じです。

これが自然園ですね、今でいう。

この時期が、当時の大体6月中旬ぐらいだったということです。これが天狗原というところですね。

この斜面が天狗原から上がったところの乗鞍岳の大斜面と言われるところです。

当時から、バックカントリーというのはやはりだったというか、みんなの憧れだったんだなというのはこの映像を見ながら感じたところですけども。

実は、ここからコカ・コーラのコマーシャルです。

ここがやらせ、映像的に、こんなうまいことに転がってきましてというので。

【猪股委員】 今のが猪又征夫さんですね。コカ・コーラをとりに行ったのが僕の父親です。

いまだにこのヒュッテは存在しますので。

ここから4年後になります。昭和47年の映像です、これが。僕らから見ると、非常に斬新で、すごいファッションブルだと思えるんですね。これが当時の梅池のスキー学校のユニフォームだったということを知っています。

これも、先ほどの白馬大池から梅池に上がってくる間の道ですけども、いまだにこのルートです。

ここは、先ほど言った越戸峰の峠で、ここからの一望が梅池で一番きれいだと思っています。

ここら辺ぐらいから、かなりスキーブームというか、ゲレンデ自体もすごい人になってきています。

43年に比べても、47年の場合、リフトの数が増えています。大分レイアウトも変わってきていて、とにかくすごい人だなというのと、一番感じるのは、このウェアのバリエーションの多さですね。今ここまで个性的にウェアを着ている人たちってすごい少ないと思うんですね。なので、ほんとうに流行の先端を当時はスキー業界が行っていたんじゃないかなというのは感じます。

多分、この年ぐらいから、スキー修学旅行というのがはやり出したと思うんですけど

も、実は、梅池がスキー修学旅行発祥の地と言われているんですけども、その当時に大体インストラクターの数が400名ぐらい必要だったというぐらい、スキーのインストラクターというか、修学旅行がはやったらしいです。

これが当時のスキーのレッスンの風景なんですけれども、1班の人数があり得ないぐらい、今では到底考えられないぐらいの人数を持ってやっていますね。

そして、インストラクターの方々とお客さんだった人たちとの交流がこの当時は、今は亡き中村勲さんなんですけど、何がびっくりしたって、お客さんにつがせているところがすごい。いい時代だったなというのが非常に。

これが今でも続いている梅池ノルディックというノルディック大会の模様なんですけど、県内でも珍しくて、ジャンプ台とクロスカントリー会場とスキー場がここまで近いスキーエリアってなかなかなくて、当時から先端を行っていたんだと思います。

これ、昭和47年の映像なんですけど、昭和42年にインターカレッジをやっていますので、そのときに笠谷さんが来て、90メートル級で。

これが今の梅池のハンの木コースですね。ハンの木コースで当時の全日本ダウンヒルの映像だそうです。

これは梅池のチャンピオンゲレンデというところで、今度は全日本のスラローム大会の映像です。今と違って、ヘルメットをかぶっている人は一人もいないんですよ。

これは当時のシュプール号だそうです。

やっとな舗装されました。

この映像から昭和63年になりますね。一番最初の映像から20年たった状況です。

これは白馬乗鞍のスキー場で、白馬乗鞍のお祭りのところで、ミス白馬乗鞍をやっている。

多分、バブルで一番いい頃だったと思うんです。

これはコルチナですね。

大分リフトのレイアウトは変わってしまったんですけども、斜面のレイアウトはほぼ一緒なので、そこに大きなホテルが建っている感じですね。

これがまた昭和63年の梅池高原で、当時は東洋一長いと言われたゴンドラなんですけれども、昭和57年につくられました。

一番右、この方がミスターデモンストレーターです。

ここで、梅池でもミス梅池コンテストというのをやっていたので、よく見て、深澤さん

がないかなと思ってずっと見ていたんですけど、残念ながら、この年はいなかったですね。何がすごかって、この真ん中にフォルクスワーゲンの方がいるんですけども、優勝した方に何と車のキーが渡されていました。すごいバブルだったと思います、ほんとうに。車のキーが渡されて、今から31年前なので、どうなっているのか、今は。

これが夜の梅池の風景です。ディスコがありまして、ちょうど僕、このとき二十歳のころなので、もしかしたらいたかもしれません。

当時からヘリコプタースキーというのが梅池では始まりました。県内では梅池と菅平が有名だったと思うんですけども、こうやって今、北アルプス稜線ということをやっていますけれども、最初のころというのは乗鞍岳の頂上まで上げてくれました。ちょうどこのころはまだそうだと思うんですけども、それが10年ぐらい前にGoogle Earthの普及によってお客様から指摘されまして、ここは国立公園じゃないかというような指摘があって、去年からヘリスキーはなくなってしまったんですけども、距離も大分短くなってしまってます。

結局、こうやってバックカントリーを滑る映像って必ずどの時代にも入ってくるように、昭和43年から63年、現在に至っても、こうやってバックカントリー、山の中を滑ることが魅力的な場所だなということと、昔からそうですけど、スキー場というのはファッションにしても何にしても、トレンドだったなというのはこの映像を見てすごく感じたところです。ああいう華やかだった時代をもう一回、どんな形でもいいので、取り戻したいなというのがありますので、皆さんから少しでもお知恵をいただければなと思いついて、この映像をつくりました。

以上です。ありがとうございました。(拍手)

【平尾会長】 ありがとうございます。

猪股さんが何で最後にしたいと言ったのかよくわかりました。これ、それ以降のこういう映像というのはあるんですか。

【猪股委員】 まだあります。

【平尾会長】 まだたくさんある？

【猪股委員】 はい、たくさんあります。

【高山委員】 こういうのは、どなたか、管理する人はいるの。

【猪股委員】 村の図書館で全部。

【高山委員】 図書館でやっている。

【猪股委員】 はい、管理しています。

【扇田委員】 一般に見せてもいるんですよね。

【猪股委員】 一般の方も自由に借りられます。

【扇田委員】 一般の人にやって、観光客とか、そういう場所でやるんでしょうか。

【猪股委員】 CATVでたまに流しているの、それを各宿で流しているときはあるんですけども。

【平尾会長】 田口さん、いかがですか。

【田口委員】 懐かしい上に、今ヘリの話が出ていましたけど、確かに根子岳と梅池がそうだったなと思いながら、今、逆にルスツなんかは、1回10万かな、取って、ヘリですぐ隣の山まで上げているんですけども、いいお客様が増えると同時に、ヘリでお金を払ってでも滑りたいという人は絶対出てきているんですね。今の国立公園の話もありますけれども、そこをどうクリアするかということで、逆に言ったら、1回10万だったら滑りたいよという人は絶対にいるんですよ。だから、どの層を狙うかで、ヘリスキーというのは日本でまだまだあちこちできると思うし、残念ながら、そういうことにあまり積極的じゃないところが多いので、特に、外人が来ているところというのはどんどんそういうのをやってもいいんじゃないかなと思いますね。

もう一つ、今たまたま、今後のいろいろ索道のかけかえとか、リフトの云々って言うていましたけど、日本のスキー場って、つくったときからレイアウトが変わっていないというのはどこも共通しているんですよね。その時代とニーズが全然変わってきて、ロングコースで圧雪のいいところを長く滑りたいという、これは世界の潮流なんですけれども、短いちょこちょこした滑りよりもロングコースを楽しみたいというのがあるので、それをさらに初心者でも滑れるように、どういうふうにしたらいいか、あるいは、合流するところでどうしたらぶつからないで立体交差にするとか、いろいろ工夫しているところがありますけど、そういうトータルのレイアウトと同時に、リフトの効率化、高質化というのは世界の潮流、こんなつくって20年以上も前のリフトが平気で動いているなんていうのは日本だけで、今、そういう問題のどうやったらリフトのかけかえが進められるかという、極端に言いますと、リフト1本ごとに特別目的会社をつくって、それに投資することができるような方法が何かないだろうかとか、もう一つ言うと、いろいろ反対論はあるんですけども、自治体所有で、もうかっていない、赤字垂れ流ししているスキー場を早く閉めるべき、需給バランスさせなきゃいけないので、それに対して国が何か手を打つべきじゃな

いかという意見も出てきて、今、そういう索道関係を中心に、どうしたらいいのかという議論が始まりつつありますけれども、まだまだそういう流れも世界からおくれているのかなと思います。

【平尾会長】 その辺も、これからのスキー観光、スキーの将来を考える場合に、また議論していきたいと思います。

ほかはどうでしょう。よろしいですかね。

それでは、大変長々と見られないビデオを今日は見せていただきまして、63年という、バブルの絶頂期ということで、62年が「私をスキーに連れてって」……。

1987年、だから62年だったので、まさに絶頂期だったんだろうなと思いますので、ああいうのがまた再び訪れるかどうかというのも問題ですし、また、あのままでいいかどうか、あるいは、新しい時代のスキー場のあり方も検討しなきゃいけないかなというふうに思いながら、今、拝見をしておりました。ありがとうございました。

それでは、今日、5名の地元の委員の皆さんに報告をいただきました。大変興味深いお話ばかりで、外部委員が30分ということでお話をさせていただいて、当初、そんな形でと思ったら、皆さんがとてもそんなことはできないというようなお話で、一応10分ということでやったんですけれども、皆さん、語り出すとどんどん語るという、もっともっと語ってもらえばよかったなと思いました。ほんとうにありがとうございました。

外部委員というか、外から見た小谷、それから、中にいらっしゃる皆さんの意見、これをやはりどういうふうにしてうまく将来展望に結びつけていくかというのが一番大事なところだと思います。

今後については、まとめて後でお話したいと思いますが、それをどうやってうまく組み上げて将来像に結びつけていくか、それから、次回はまた地元の方々から、今度ヒアリングというようなことで2名の方を予定しておりますので、そういった意見も入れながら、将来像を組み上げていくという作業に入りたいと思います。5名の方々、今日はほんとうにありがとうございました。

地元の委員の方々の発表はこれで一区切りとして、前回、武者先生からご報告いただきましたので、事務局のほうでまとめていただいておりますので、簡単に説明していただいて、確認も含めて、若干、それで意見交換ができればなと思いますので、事務局のほうでお願いいたします。

【 】 次第の後ろに、資料1ということで、先日、第3回の報告と意見交換の概要

ということでまとめさせていただきました。前回はそうなんですけれども、中身が非常にあるので、つまんでつくって薄いものになってしまっているかなということはご容赦いただければと思います。簡単に説明をさせていただきます。

まず、1点目、武者先生からの報告で、人口動態のご説明をいただきまして、長野県の高度経済成長期から現在に至るまでの自然増減、社会増減、それによる人口の動きというようなお話をいただきまして、今は自然減がとまらないで、さらに下に下がっていくというお話。

それと、小谷村が全国の村の中でどんな位置づけかというお話で、人口規模は平均的であるけれども、相対的に減少割合が大きいほうに入っているよということでした。

また、これは長野県の若者の出と戻りを1クラス40人というものをモデルとして示していただきまして、高校を出ていくと、40人のクラスのうち、約30人が外に出ていく。就職を機に10人くらい戻って、最終的には22人くらいが地元に戻るといような現状で、常に半分以上の人材を失っている状況であると。

小谷村の場合は、さらに途中、長野市ですとか松本市の戻りというものもあるということで、Jターン、これが多いので、戻る人数はさらに少なくなっているのではないかとということでした。

あと、小谷村の25歳から29歳の就業者数についてお話がありまして、総数では大きく減っている、中でも、女性の減り方が大きいところが特徴だということ、その中身としまして、全国的には女性が定着している業界、医療・福祉分野、こういったところでも、数は少ないサンプルではあるけれども、減少しているという特徴。依然として、卸、小売り、飲食、宿泊、こういったものが主力産業となっていることが見えるというお話でした。

あわせて、非就業者の割合、これがここ10年間で急激に、特に女性は減少が大きいということでした。

続きまして、まちづくり論の転換ということで、武者委員、ご専門のまちづくりで、こちらの失敗事例というようなことも含めまして、観光に生かせる部分があるんじゃないかということでお話をいただきました。全国のまちづくり、いわゆる中心市街地活性化というようなものを中心としまして、多額のお金が流れてきたけれども、ほとんど失敗をしているというような状況、これがどういう原因かということで、プランニング、いわゆる計画によるまちづくりが進められてきたことがその原因ではないかというお話でした。

この中身としては、都市は大きくなるものということを前提としまして、近代的で便利

な、効率的で格好いいまちをつくることを目的に、工学的な手法で進められてきたからではないかということです。

現在は、人口が減っている人口減少の時代であって、求められているのは都市化よりもほかの都市とは違う都市らしさ、近未来化というより持続可能性のある都市づくりということで、そういった中で人文科学的な考え方も必要になってきているということ、工学的な思想には、考え方にはいい計画やモデルみたいなものがあって、それを目指して必要な機能ですとかデザイン、そういったものをインプットすれば自動的にそういうまちづくりができるのではないかという考え方があったのではないかと。都市を整備する方程式、一般的な法則があるという幻想があったのではないかというご指摘。でも実際には、そのまちがどのような場所であって、何に魅力があって、人々がそういったものを感じて行動する、それによって活性化していくということは、やはり方程式では出てこないことということで、まちづくりのメカニズムの解明が大切ですよというお話がありました。

一方で、今度、長野市の例をいただきまして、こちらのほうは門前でいろいろな外からの人、特に芸術系のいろいろな勉強したり経験したというような方が結構今、集まってきている非常に珍しい例だということでお話をいただきました。

こちらの、先ほどの計画、プランニング等に対して、近年ではアーバニズムという言い方をされているということですが、計画というより人々の行いの連鎖がよいまち、地域を生んでいくというような考え方、そういうようなものが出てきているというお話で、長野市を例にしまして幾つかお話をいただいたところです。

ここで大事な点というのは、最初に歴史や文化といった地域の分脈を読み解くという取り組み、活動があって、そこからいろいろな人の取り組みが出てきているというところで、大切なのは、その後で戦術的に組織や計画ができてきているというお話でした。

あわせて、長野市の例では、住民のアンケートを行っていただきまして、古くからの住民の方、旧ネットの方より新たに入ってきた住民の方のほうが相互扶助を実際にはやっている、実施しているという割合が高かったということで、まちづくり、活性化とあわせて、伝統的なつながりの再生、コミュニティーの再生も進んでいるというお話でした。

これを小谷村にどう参考にしていくかというところでは、小谷がどういう場所であって、魅力は何かというようなところをしっかりとリサーチして、それをメディア等を通じて見える化していくということが大事ではないかと。

さらに、遠回りのようですが、小谷村のそういった環境資源に裏打ちされたライ

フスタイルというものを磨き上げていくということが大事ではないかというようなお話がありました。

そのお話を受けまして、意見交換では、ここに書いてありますけど、まず、まちづくりの観点ということでは、民間のまちづくりということでイオンモールのお話が出たかと思えますけれども、こちらにつきましては、短期的には経済効果も当然あるけれども、逆に、それがあがるゆえに、ある間は住民によるまちづくりの考え方、どういうふうにしていこうかというような議論がとまってしまうという、思考停止になるというようにリスクがあるのではないかというお話もありました。

また、田口先生のほうからですけれども、広域的な地域づくりでのお話がありまして、やはり官主導で成功した事例はほとんどないと。うまくいっているところは民の発想が基本にあって、後から官がついてきて成功しているという事例は幾つかあるということで、雪国観光圏のお話ですとか、川場村と世田谷の交流、その他の事例をお聞きしたところで

す。

平尾会長からは、まちの魅力はそこで暮らした人の記録の集積であるという言葉、こういったものの紹介がありまして、先ほどの武者先生のところにもありましたけれども、そのライフスタイルというようなものが地域に、記憶という言い方でしたけれども、そういった形で残っていることが最終的にその地域の魅力になっているというお話がありました。

あと、村内の委員さんからの意見としまして、梅池は移住者や外国人が多く、外から来ている人が多いけれども、イベントなんかをやるときにも、そういった外から来た人のほうが協力的ではないかと。そういう人たちには行政の垣根もない、というお話がございました。

新ネットの方たちは地域に魅力を感じて来てくれている人なので、好奇心があって行動的、また、情報に対するアンテナも高いので、いろいろ声かけすると協力してくれるという話がありました。

長野市の例の中で、橋渡し役の方がいて新ネットと旧ネットをつなげているんじゃないかという話がありまして、まさにそういうような状況であるということで、そういったハブとなる人がいて、新ネットの人たちが活躍できていると。

委員さんのお話の中では、外から旧ネットに入ってきているというのはお嫁さんとか、お嬢さんという方がいるので、そういった方がこれからハブになり得る存在で、まちづく

りのキーマンにもなっていくのではないかというようなご意見がありました。

それとあわせて、人口動態の話から、小谷村で女性、女の子って書いてありますけれども、学生が帰ってきたいと思える村づくりが大事ではないかということ、今の子供たちは外で勉強しているので、そういった子たちが戻って活躍できる仕事の間ですとか、活躍の場所が必要ではないかという意見がありました。

小谷村では、南と北、人口も違うし、地域の景色も違うということで、人口減少が激しい地域でも、空き家などにひかれて新しく来てくれる人はいるので、なかなか新しく出生はしないけれども、そこに希望を見出していきたいというご意見がありました。その際にも、どの地域を選ぶかということはいろいろな考えがあるけれども、やはり地域的文脈を読み解いていくということが大事になってくるのではないかというご意見です。

また、他地域との交流がその地域の活動を続けていく上でとても力になっていると。そのためには、地域で先頭に立ってそういうことを進めてくれる人が必要で、そういった人材をまた育てる人が一番大事にはなってくるのではないかという意見がありました。

同様に、北と南では景色が異なっているので、小さなコミュニティで地域づくりを発展させるためには、歴史をさかのぼって考えること、違うということが何であるかということに来ていただくお客様に紹介していくことが必要ではないかというご意見。

一方で、ブランディングということを考えていくときには、広域的にそういった企画をして形をつくっていく必要があるのではないかという意見をいただいているところでございます。

概要につきましては以上でございます。

【平尾会長】 ありがとうございます。

私のほうから1点だけ、先ほどのまちづくりのメカニズムの解明というところで、武者先生の報告の中に小谷的ルーラリズムという言葉が出てきて、これからの一つのキーワードとして考えていかなきゃいけないなと思いながら、私、拝聴していたんですが、この中にその言葉が抜けているなと思ったので、それを入れておいていただきたいというのが私からのお願いです。

これについては、武者先生、何か補足ありますか。

【武者委員】 うまくまとめていただいて、ありがとうございます。

前回の私の発表は、実は、今日の皆さんの発表とセットで考えると、非常に腑に落ちるところが幾つかあるんじゃないかなと思っているんですね。

というのは、大きく2つありまして、1つは、前半に人口動態のお話をしたんですけれども、今日、深澤さんが移住の第1世代、第2世代、第3世代とおっしゃいましたね。まさにこういうことだと思うんです。どういうことかという、我々、地方創生で出てくるデータって、基本的には、あの人口は線形なんです。線形というのは、今のトレンドの引き延ばしなんです、ただの。だけど、そういう考え方じゃだめなんじゃないかというのが前回のメッセージで、つまり、深澤さんのように、移住の世代を1、2、3と考えて、実は、当然ながら、第4世代、第5世代、そういうものがあり得るわけですよ。それって一体何なのかというところに思いをはせないで、単にあの線形的な予測にぶら下がっているだけじゃ何もできないよということなんです。そういう歴史的な潮流を読んで、我々もその先の予測を考えようじゃないかと。

高山委員さんが前、フューチャーデザインというお話を紹介いただいて、これは実は私も含めて3人の信大のメンバーで研究していることなんですけれども、これは何かというと、将来の仮想的な将来世代というのを設定して、将来って、今、ここに将来世代っていないですよ、未来人ですから。未来人を仮につくって、その未来人と現代人である種、議論を戦わせて物事を決めていくというやり方なんです。これは実は未来の人の、未来人の利害って、我々、全然今、関係なく議論しちゃっているじゃないですか。実は未来人のことってすごく大事なんだけど、それを代弁する人っていないものですから、結局、どんどん目先の政策に我々は走ってしまうという、そこを何とかしよう仕組みで、これを、よろしければ、またいつかご紹介したいなと思っていますが、いずれにしても、そういうふうな思考をしないとまずいんじゃないかというのが前半の論点でした。

後半のまちづくりのメカニズムという、何だかよくわからないような抽象的な言い方をしているんですけども、実はこれも今日皆さんのお話とすごく直結するところで。例えば、藤原さんの取り組みについて、扇田さんが、これって、観光の枠組みじゃ、絶対ピックアップできないよねというお話をしましたよね。まさにそういうことでして、実は、多分ルーラリズムってそういうことだと思うんです。今までの計画的なまちづくりだと、分野ごとに振り分けることがどうしても必要なんで。でも、藤原さんの取り組みって、多分すごく分野横断的で、到底観光という枠では、注視できないし、計画するというよりは、やりながらどんどんそこで事後的にアイデアが出てきたことばかりだと思うんですよ。絶対今の姿、先ほどの幾つかの取り組みって、事前に予想できたことってほとんどないと思うんです。

こういうことって、原理的に計画できないと思うんです。でも、計画できないから、じゃ何もできん、わけがわからないかという、そうでもなくて、計画はできないけど、そこに何らかの論理はあると思うんですね。論理があるというのは、つまり、藤原さんたちは多分、小谷の分脈をきちんと読み説いて、そこで何らかの場所をつくり、そこでいろんな分野が連携し、それで事業化し、それをまた情報共有して新しいブランドをつくっていくというんですね。そういう部分を一つ一つ丁寧に読み解いていくことがまさにボトムアップのまちづくりなんじゃないかというお話を前回させていただいたつもりなんですけど、今日非常に、そういう意味でいい事例を出していただいてありがたいと思っています。

【平尾会長】 ありがとうございました。

この小谷的ルーラリズムということの背景は、先ほどの田原さんの小谷学にもありましたが、ルーラリズムの魅力というのは、自然ということももちろんあるでしょうし、そこに暮らしていた人の考え方もあるでしょうし、多分、人口増についての推計も、そこに住んでいる人が世代によって相当質が違うなということも今の武者先生のおっしゃった線形の話ではないよということもきちっと受けとめていく必要があるのかなと思いました。

そんなことで、武者さんが一番最後に報告してもらって、その後、地元の委員の皆さんがお話しいただいたというのはとてもよかったなと思いました。ほんとうにありがとうございました。

この辺をこれからさらに詰めていく必要があるだろうなと思いますので、また引き続き、もう少し中に踏み込んだ議論をさらに積み上げていきたいなと思いますので、よろしく願いいたします。

じゃ、これは最後になるんですが、今後の予定ということですが、冒頭でもちょっと申し上げたとおり、外部の全ての委員の方々の報告はここで終了をしたということなので、あと、さらにヒアリングをあと二方、予定されておりますので、その辺の予定については、事務局から次回の予定とあわせてお話をいただけますか。

【観光振興課長（関）】 それでは、次回ですけれども、ご都合の悪い委員さんもいらっしゃるんですけれども、2月26日、次回を開催させていただきたいと思います。

今もお話がありましたように、地元の方からのヒアリングということで、2名の方からご連絡いただいておりますので、ご参加をいただいておりますという形で進めさせていただきたいと思いますので、よろしく願いいたします。

【平尾会長】 じゃ、2月26日ということでよろしく願いいたします。

あと、その次の回については、外部スピーカーからの講演ということも当初、予定をしておったんですが、その辺、また皆さんとご相談なんですが、これだけいろんな要素がここで出てきましたので、もう少しこれを整理した上で、このメンバーでもうちょっと深掘りした議論を積み上げていきたいなと思います。

なおかつ、それで不足があれば、この点について少し外部の方々、外部スピーカーを呼ぼうじゃないか。適切な方が、こういう人がいるよということであれば、その方をお呼びして、さらに深めていくというようなことを考えていきたいと思います。

今の予定としては、年度末に形を整える、そんな予定で進めてまいりたいと思いますが、若干、そのあたりはいろんな要素を組み上げていく中で、報告書ベース、どんな報告書にするのか、中にどのくらいのものを持っていくかということによって、若干、最後の仕上がりは新年度にもつれ込むこともあり得るのかなと思います、その辺はまた事務局と相談しながら、最後、調整していきたいと思います。

大体以上のところで、今日は地元の委員の皆さんの密度の大変濃いお話を聞かせていただいて、今後の展開にもこれでさらに弾みがつくかなと思いました。ほんとうにありがとうございました。

それじゃ、私のほうはこれでマイクをお返ししますので、事務局のほうでよろしく願います。

【観光振興課長（関）】 それでは、予定しておりました議事については無事終了させていただきましたので、特に委員の皆様から何かございましたら、またお出しをいただきたいと思いますが、よろしいですか。

ありがとうございました。本日は大変長時間にわたり、特に地元の委員の皆様には、大変お忙しい中、資料の整理から本日の発表ということで大変ご協力をいただきましてありがとうございます。ほんとうにいいお話を聞けたいい機会になったということで、大変感謝を申し上げます。

それでは、ただいまをもちまして第4回の小谷村観光地域づくり審議会を終了とさせていただきます。本日は大変ご苦労さまでした。ありがとうございました。

— 了 —